**義理とコンプライアンス**

令和元年11月26日　小林

目次

1. はじめに

2. 義理の世界

　2.1長谷川伸の「夜もすがら検校」

　2.2讃岐国の作者不明の物語

　2.3 ロッキード事件東京地裁判決

3. 義理とは－学者の見解

　3.1源了圓の見解

　3.2中根千枝の見解

　3.3桜井庄太郎の見解

　3.4川島武宜の見解

4. コンプライアンスへの影響

　4.1 義理の重視

　4.2 人間関係の重視

　4.3 ソトに対する関心の希薄化

5. コンプライアンス確保のために

　5.1義理のメリット・デメリットの認識

　5.2 儀礼の廃止

　5.3 何でも言える人間関係

　5.4 ソトの世界を意識させる

6. まとめ

1. **はじめに**

義理は、日本の文化における一つの特徴的な側面であり、日本人の特異な思考や行動を生み出している。このことは、日本人にとっては、あまりにも当然のことであるため、ルース・ベネディクトにより「菊と刀」で指摘されるまで、われわれはそれをほとんど自覚していなかったようである。

日本人は、義理を感じたときに、その義理を果たすべく行動する。典型的には、お中元・お歳暮の贈答である。例えば、会社の上司や学校の恩師にお中元・お歳暮を贈るのは、その上司・恩師に義理を感じているからである。その義理に報いるべく贈答をするのである。バレンタインデーの義理チョコなどは、現代においても義理の文化が生きている証拠と言えるのではないだろうか。

このような義理によって結ばれた関係において特徴的なのは、親密な関係にある友人どうしではないということである。上司・部下の関係や恩師・教え子の関係などは、典型的な義理の関係であるが、その上司や恩師といくら親しい関係にあるからといって、日本人はその上司や恩師を友人と認識しているわけではない。欧米では、贈答をするのは、その関係が家族や友人、恋人のように親密な関係にあるからである。親密だからこそ、プレゼントをするのである。日本においては、逆である。親密であるはずの夫婦間では贈答をする伝統はなく、その一方で、親密ではない上司・恩師への贈答は社会の慣習になっている。

現代においては、このような状況は変化しつつあるものの、われわれ日本人は、義理チョコで分かるように、いまだに義理の文化の影響を受けているようだ。

本稿では、義理に関する学説を俯瞰して義理とは何かを論じた上で、義理がどのように日本人の思考や行動に影響を与えているかを明らかにする。そして、義理の影響がコンプライアンスにとってどのような意味を持つのかを論じ、最後に、義理の観点からコンプライアンス確保のため、どのようなことに留意すべきかを検討していくこととする。

1. **義理の世界**

まず、義理とはどのようなものなのかを知るために、具体的な形でそれを見ていくことにしよう。

一番最初に取り上げるのは、長谷川伸の短編小説「夜もすがら検校」という作品である。長谷川伸（1884-1963年）は劇作家・小説家であり、「一本刀土俵入」や「瞼の母」などの作品で有名である。ここでは、1924年発表の「夜もすがら検校」を採りあげる。

二つ目は、讃岐国の作者不明の物語である。江戸時代の武士の妻が、殉死する夫に対して見せた義理にもとづく行動は、現代人の目には不可解と映るであろう。しかし、この不可解さは、逆に義理の本質を突いているとも言えるのかもしれない。

三つ目は、ロッキード事件東京地裁判決である。被告が国会での証人喚問において行なった偽証につき、会社への義理にもとづき偽証に及んだことを理由に、執行猶予が付いたものである。義理を情状酌量の理由とした点において、この判決は批判されている。

* 1. **長谷川伸の「夜もすがら検校」[[1]](#footnote-1)**

以下は、「夜もすがら検校」のあらすじである。

「京に住む玄城という盲目の平家琵琶の名手は、「夜もすがら検校」と呼ばれていた。彼の語る平家物語は、夜通し聞いても飽きないということからこのように呼ばれるようになった。評判を聞いた江戸の大名は、玄城をはるばる京から招いて、彼が語る平家物語を楽しんだ。玄城は、伴の者を連れて帰路についたが、木曽路にさしかかったとき、伴の者に財布を奪われ、雪の山中に置き去りにされてしまった。玄城は雪の中で行き倒れているところを、通りがかりの若者に助けられ、家に連れていかれた。その若者の語るところによれば、食うに困って夜逃げの途中に行き倒れている玄城を見付けたとのことであった。そんな若者の家であれば、囲炉裏にくべるものはなく、凍えている玄城を十分に暖めてやることができない。そこで、若者は仏壇をこわして玄城の身体を暖めた。数年後、玄城が住む京の家にその若者が訪ねてきた。彼はある事情で失った田畑を買い戻すため、他国へ働きに出ていたが、目的はまだとげられていないと言う。玄城は彼を歓待したが、囲炉裏にくべる薪がなくなった。玄城は、最後に高価な琵琶をこわして囲炉裏にくべた。」

これが、義理の論理である。義理とは、人の期待を裏切らないことである。寒いときに暖かくしてほしいという期待、仏壇を燃やして暖めたのだからそれに相当することを返してほしいという期待、一宿一飯を提供したのだからその好意を返してほしいという期待。その期待に応えるのが義理である。これが日本人の道徳になっている。

義理人情の由来は、日本人は神を信じずに人間を信じたことから来ている。つまり、人間の想いや怨みを信じたのであり、それが祖先信仰や死霊のたたりを恐れることにつながった。これが日本の原始宗教であり、日常のモラルとしては「人の期待を裏切ってはならぬ」という義理人情の思想になった。

* 1. **讃岐国の作者不明の物語[[2]](#footnote-2)**

以下は、讃岐国に伝わる作者不明の物語である。

「讃岐国に美男の武士と美女がいて、二人は結婚したが、ほどなくして、その武士の仕えるお殿様が亡くなられた。その武士は、妻に殉死する決心であることを伝えた。するとその妻は、あわてた様子もなく「潔く最後をとげてください。私は縁があったら再婚しますから、ご心配なく」と言った。夫は妻の言葉をいぶかしく思ったが、見事に切腹して最後をとげた。その直後、妻も自害した。これを聞いた世間の人々は、「夫の殉死の決意がゆるがないため、わざとつれない言葉を言ったのだろう」と妻の心づかいをほめたたえたのであった。」

小池利正「あまえと義理－日本人の心の構造」（脚注2）によれば、義理には、二つの種類があるとのことである。一つは、「ソト」が「ウチ」に入った義理であり、もう一つは、「ウチ」が「ソト」へ出た義理である。前者の「ソト」が「ウチ」に入った義理は、他家から嫁いできた妻の立場のことを言う。その妻は、夫の両親と義理の親子の関係になるわけで、これが「ソト」が「ウチ」に入った義理である。後者の「ウチ」が「ソト」へ出た義理は、上記の物語が描く義理である。相思相愛の二人は互いに「ウチ」の世界にいる。「ウチ」の世界は人情の世界である。そこに殉死という究極の義理が入り込んできた。そのまま殉死ということになると、夫婦間の人情は断ち切れずに未練が残る。それではいけないと、妻は「ウチ」の世界から一歩「ソト」の世界へと出て行き、人情を断ち切ったのである。人情を断ち切り、つれない言葉を夫に投げかけた。これにより、夫も人情を断ち切ることができ、見事に義理を遂げることができたのである。

このように、義理とは、「即他・非私」の世界である。他人に即し、私をなくすことである。他人の意向を自分の意向として行動することであり、自分を無くして他人の意向に従うことである。上記の物語に則して言えば、妻は夫の殉死の意思を自らの意思として受け入れ、自らの人情を殺して、夫につれない言葉をかけたのであった。

* 1. **ロッキード事件東京地裁判決[[3]](#footnote-3)**

ロッキード事件東京地裁判決（1982年1月26日）では、国会で偽証した全日空経営幹部に、会社に対する義理を重んじて偽証したとして、執行猶予が付いた。判決は、次のように述べている。「・・・・・偽証の点に関しては、その主たる動機が全日空の名誉と信用を守ろうとすることにあったと認められること・・・・に徴し、特に刑の執行を猶予することとした。」と。

この判決には、批判が多い。なぜなら、経営幹部は会社の恩義に報いんがために、国会で偽証したのであろうが、そこには、国民を欺こうとしたことの重大さが欠落しているからである。つまり、会社のためを思ってやった不正行為なら、情状酌量されてしまうということになる。不正行為の正当化につながるのである。

竜嵜喜助「裁判と義理人情」（脚注3）によれば、このような会社への義理を大切にする考え方は、身内（ウチ）の信頼は大切にするが、外（ソト）の集団に対しては嘘をついてもかまわないという考えに通じる。ソトの信頼に対する関心の希薄化である。

それでは、なぜこれほどまでに義理への思いが強いのだろうか。竜嵜によれば、仏教で言う「縁」という考え方が背景にあるのではないだろうか。たとえば、入社試験に合格してある会社に入った場合、「縁あって」この会社に入ったと考えたりするのではないだろうか。また、男女の結婚も、「縁あって」結ばれたと言われることがある。「同期の桜」とか「同じ釜の飯を食った仲」と言って、われわれ日本人はちょっとしたことで「縁」を感じてしまう。見知らぬ人でも「袖すり合うも多生の縁」[[4]](#footnote-4)と言って、「縁」を感じてしまう。

日本人は、「縁」や「縁起」、「因縁」にもとづく人間関係を大切にする。そのような関係の集団は、身内と呼ばれ、身内同士では信頼関係が重視される。この信頼関係の背後には、甘えの心理（土居建郎）があり、あるいはタテ社会の階層構造（中根千枝）があるのであろう。このように、信頼関係にもとづく人間関係を日本人は重視するところに、義理の感情が生まれてくるのであろう。

1. **義理とは－学者の見解**
	1. **源了圓の見解**[[5]](#footnote-5)

儒教における「義理」の原義は、正しいすじ道である。義理の観念は、宋の時代（960-1279年）に義理学として完成された。これを宋学という。このような義理は、君臣・父子・夫婦・長幼・友人間の関係の倫理であり、人と人との普遍的道徳というより、関係に依存した個別主義的道徳である。特に、君臣の関係を重んじる義理の学である。宋学は、狭義の意味では、朱子学と呼ばれている。

宋学は日本に輸入されたが、義理の観念「正しいすじ道」は、日本人に適合するように日本化されて定着した。日本における義理の意味は、人が他人に対して交際上のいろいろな関係から努めねばならない道を意味し、あるいは、体面・面目や情誼（人と付き合う上での人情や誠意）を意味する場合もある。それでは、なにが義理の意味を変容させたのだろうか。

日本の古代稲作社会では、田植えや稲刈り等において共同作業が必要とされるので、助力を受けた人はそれに対してお返しをしたいと思い、相手方はそれを期待したであろう。周囲の人達も、適切にお返しがなされるか見守ったであろう。村落の規模は小さく、村人は何代にも亘り土地に定着しているので、お返しをすることは、社会的拘束力を持つようになった。ただし、狩猟社会でも、もらったらお返しをするのは習俗として成立していた。これは古代北欧の詩に示されている。中国の「水滸伝」（15世紀頃）からも、贈答への返礼が社会的な規律になっていたことが分かる。

日本的な「義理」を生んだ要因は二つある。

一つは、多神教である。これが義理を個別主義的道徳にした。中国も多神教であるが、「天」という普遍者が存在する。したがって、そこでは、普遍的な道徳が語られることになる。ヨーロッパには絶対者としての神がいるので、「義務」という言葉で普遍的な道徳が語られる。ところが日本では、神自体が相対的な存在なので、厳格な普遍主義的性格を持つ律法、すなわち神の命令・戒律は生じない。神との契約・約束という思想も生まれない。ここにおいては、人－人という水平関係において成り立つ道徳が重要となる。神－人という垂直関係の道徳ではないのである。この人－人という水平関係における人は、個人として自立した人ではなく、他者に依存して存在する人である。自分－他人の関係がどのようなものなのかに応じて、自分の意味付けが変わってくる（すなわち、他社依存の自己規定）。つまり、その都度の関係の成否が、人間存在の成否にもつながるのである。だから、日本では、義理が重要な意味を持つのである。

日本的な「義理」を生んだもう一つの要因は、江戸時代の封建社会に朱子学が浸透したことである。社会の頂点に立つ者は武士であり、その武士は戦いがなくなってまだ日が浅い時期に、朱子学を学んだので、自己の名誉の意識と世間的念慮とが未分化の、いわば恥の文化との共生における個別主義的な心情道徳としての義理の観念が形成されたのである。しかし当初、利益を追求する町人には、義理の考えは及ばなかった。ところが、商業組織の発展とともに町人にまで浸透するようになった。

中根千枝のいうタテ社会的な人間関係が社会の全体をおおい、公としての義理の拘束力はますます強くなった。現代では（1973年当時）、終身雇用制のもと組織へのコミットメントは深められ、私人としての生活領域は少なくなった。こうなると、公人＝組織人としての義理が強い拘束力を持ってくる。つまり、会社への義理、上司への義理、同僚への義理である。

* 1. **中根千枝の見解**[[6]](#footnote-6)

義理人情の「人情」は、人間的な自然の感情であり、世界共通の感情である。日本人は人情に厚く、英国人は薄いなどということはない。人情の表現形式や発露の度合いは多少異なるとしても、質的に異なることはない。

これに対して、「義理」は外国語に対応する言葉がない。なぜなのだろうか。義理とは何なのだろうか。

義理は、人と人との断ちがたい関係を内包し、その関係は後天的に設定されたものである。たとえば、結婚を契機に義理の父母、義理の兄弟などの関係が生じる。

結婚以外に、人から人への何らかの利益の提供により、義理の関係が生じる。ただし、提供する義務がなく、それを受ける権利もないことが必要で、その利益が第三者からも重要と認識可能であることが、必要である。

ところで、いかなる社会においても、人から人へ何らかのものが与えられることは、社会学的な意味をもつことが、外国人学者により指摘されているが、なぜ日本ではそれが義理の関係になり、外国ではそうならないのだろうか。

これを考察するには、義理の関係が形成される諸条件を考察することが必要である。まず一点目として、与えられる利益が大きな意味をもち、返済が困難であればあるほど、義理の関係は強固になり恒久的になる（命の恩人、人生の恩師などを言うのであろうか）。二点目は、多くを持つ者が持たざる者に何かを与えた場合、義理を生じないということである。たとえば、親から子への贈与、貧者へのほどこしなどでは、義理は生じない。これは、贈与やほどこしの前に、親子とか富者・貧者（階級）という関係が前提としてあるからである。この関係にもとづいて、贈与やほどこしがおこなわれるので、義理の関係は生じない。ただし、日本では、富者・貧者の差があまり考慮されず、基本的に両者は同等とみなされ、義理の関係が生じやすい。三点目は、日本での義理の関係は、二者間で完結しているということである。下図のように、X、Y、Zの三者を考えた場合、X－Yの関係とY－Zの関係がそれぞれ完結しているのである。この関係において、与えられたから返礼するのである。X－Zの間には、なんの関係も成立しない。

Ｘ　⇄　Ｙ　⇄　Ｚ

その一方で、インドでは、与える人ともらう人が固定的である。たとえば、母の兄弟姉妹においては、兄弟は姉妹の子どもに与えるだけで、逆の流れは避けなければいけないとされている。すなわち、下図のように、一方通行になる。

Ｘ　→　Ｙ　→　Ｚ

この一方通行の流れは、中根が留学していた英国でも見られた。滞在中に英国人にお世話になったが、その英国人は、返礼などよいから日本に帰ったら英国人に同じようにしてあげてください、と言った。

日本では、一対一の義理にもとづく人間関係が累積されて、タテ社会を構築している。この人間関係は、XとYを一つの部屋に閉じ込めているようなもので、X→Yの支配関係となるのである。

* 1. **桜井庄太郎の見解**[[7]](#footnote-7)

贈答への返礼をしなければいけないとの記述は、古くは室町時代に見える。この習慣はそれ以前にもあったかもしれないが、文献では確認することはできない。

江戸時代になると、義理という言葉はさかんに使われた。この義理は、古代中国では社会道徳であったが、宋時代には君臣の間で守るべき人倫的道徳と理解されるようになった。江戸幕府は朱子学を重んじたが、「東照宮御遺訓」（徳川家康の将軍退位のときに語った内容を書き留めたもの）には、武道は命を的にかけ、義理を勤めることを第一とする、と書かれており、当時の学者、中江藤樹や山鹿素行、貝原益軒も義理を重視した。松平定信（老中、1759-1829年）も、義理にさときを士とし、利欲にさときを町人とすると説いている。江戸時代には、義理は君臣の間で守るべき道という宋学的な理解がなされていた。

このような義理についての武士の解釈は、町人には通用しなかった。町人にとっての義理は、井原西鶴や近松門左衛門の作品に見られる。西鶴の「武家義理物語」において使用されている「義理」の意味は、(1)好意に対して好意を返すこと、(2)約束を守ることである。西鶴は、武士の同僚間での義理をこのように理解していることに注意が必要であり、また、西鶴という町人から武士を見たときの義理の理解であることに注意すべきである。近松の作品は、町人同士の義理を描いているが、その意味は、西鶴が描く武士同士の義理と同様である。

それではなぜ、西鶴や近松は義理を「君臣の間で守るべき道」ではなく、「好意に対して好意を返すこと・約束を守ること」と解したのだろうか。好意に対して好意を返すこと・約束を守ることは、広く諸民族でおこなわれてきた習慣であり、日本にも古代から存在していたであろう。しかし、日本語には、それを表す言葉がないため、義理という言葉をこれにあてはめたのであろう。

農民の間でも、好意に対して好意を返すことは、習慣としておこなわれていた。江戸時代に人形浄瑠璃や歌舞伎が村落に入ってきたことで、社会規範としての「義理」という言葉を知り、好意の交換を義理と呼ぶようになったのであろう。このようことで、本来の義理の意味が変化してしまったと考えられる。

* 1. **川島武宜の見解**[[8]](#footnote-8)

日本において、義理は社会規範である。一定の人に一定の行為を命じるものであり、その命令実現に対し、保障手段、すなわち社会的サンクションがある。

義理は、協同体的な関係から生じる。それは、以下の特徴を持つものである。

(1)継続的な関係である。このような関係は、関係を継続させようと年賀状を出したり盆暮れの贈答をしたりする。

(2)このような協同体的な関係は、ある特定の事項に限定されるのではなく、生活全般を拘束する。会社の上司・部下の関係は、会社だけでの関係ではなく、上司・部下の生活全般に関わってくる。

(3)このような協同体的な関係は、当事者の意思に関係なく義務＝義理を発生させる。そこに当事者の選択の余地はない、あるいは少ない。だから、義理を果たすのは、不本意ながらとなることが多い。

(4)具体的・個別的なface-to-faceの人間関係である。だから、顔を見せることが、義理を果たすことになる。義理を欠くと面子を失う。

(5)情緒的な関係であり、利害計算の上に成り立つ関係ではない。非常にしばしば、擬制された（うわべだけの）情緒で支えられた関係である。だから、程度の差はあれ、人情と結びついている。擬制された情緒で結ばれた関係は、仲の良い関係ではない。

(6)協同体的な関係であると同時に、身分階層社会的性質を持った関係である。義理は一定の身分階層的地位に伴い生じると同時に、一定の身分階層的地位（その面子）を持っている。我々はすべての社会関係を協同体的な（特に、家族的な）関係にしようと努め、そのような関係でなければ我々は不安になる。例えば、取引関係であっても、それを継続的な身分階層的・人身的関係にしようとする。顧客は「お得意様」であり、売り手は「出入りの商人」となる。ひとたび設定された取引関係においては、取引先を変えるのは義理を欠くことになり、相手方に対する重大な侮辱・裏切りとなる。義理は、経済法則をゆがめている。

上記の例外として、以下の二点を指摘することができる。

(1)義理は協同体的関係から生じるが、その関係は相互的ではなく、しばしば一方的である。だから部下に義理は生じても上司に義理は生じない。

(2)家族は協同体的な関係であるが、ここでは義理は生じず、人情で家族は動く。ただし、義理の親子、義理の兄弟姉妹のあいだでは義理が支配する。

1. **コンプライアンスへの影響**
	1. **義理の重視**

義理を重んじることは、日本人の日常生活において人と人との交流を円滑にする。これは、義理が重んじられるようになった背景としての稲作文化を考えれば、容易に理解できることだろう。隣り近所の村人たちは、互いに作業に協力した。このようなことを通じて、助けられれば、そのお返しで助けてあげるという互助の精神が育まれ、それは長い年月の間に道徳にまで高められていった。このような道徳を日常生活において実践していけば、より良い社会の実現につながっていくことであろう。

その反面、コンプライアンスの観点からは、義理の負の側面を注視しなければならない。会社等の組織において義理が発生する関係は、一つは会社と社員の関係であり、もう一つは上司と部下の関係である。この二つの関係において見られる義理の負の側面としては、会社に対し、あるいは上司に対し滅私奉公的な忠節が求められることにあるのではないだろうか。例えば、部下は上司からほどこされた恩恵に対して、それに報いようと、自分を犠牲にしてまで、あるいは自分の良心を犠牲にしてまで、上司の期待に過剰に応えてしまうようなことである。

上記のロッキード事件における被告の偽証は、会社に対する義理を過剰に尊重した結果、正義を軽視し、国民（世間）を欺いてでも会社の体面を守ろうとしたことから生じたものであろう。

日常的にも義理の過剰重視は、われわれ自身経験しているのではないだろうか。例えば、長年にわたり上司・部下の関係にあるような場合、われわれ日本人は、その上司の命令・指示に対して異議を差しはさむことことに抵抗感を感じるのではないだろうか。特に、その上司に仲人をしてもらった、あるいは息子の就職に際し世話になったなど個人的な恩恵を受けている場合、より強く義理の感情を覚え、その命令・指示がコンプライアンス上疑義あるとしても、それに対し拒否の意思を示すことは、困難と感じる場合もあるのではないだろうか。ここに、コンプライアンスを軽視することとなる落とし穴が、あるように思われるのである。

* 1. **人間関係の重視**

義理を重んじる感情は、人間関係の重視につながるように思われる。義理で結ばれた関係において、儀礼的な贈答が行われ、年賀状がやり取りされるのは、その人間関係を重視し、これを維持しようとするためである。

筆者の経験から感じるのは、その人間関係を重視するのは、義理を欠く人間だと見られることを嫌い、あるいは面子を失うことを避けようとする心理から来るのではないだろうか。その関係を維持したいがために贈答をし、年賀状がやり取りされるのである。これにより、義理は果たされたわけであり、面子を失うことはない。

このように、義理を重んじる感情は、人間関係の重視につながり、その人間関係を損なうような義理を欠くことを避けようとする傾向にあると言えるだろう。特に、上司と部下という関係においては、この傾向が強いのではないだろうか。なぜなら、その関係は、会社という閉鎖的な空間において成立する関係だからである。この関係を断つには、会社を辞めなければならない（辞めても関係は続く場合もあるだろうが）。

このような上司・部下の関係において、コンプライアンス上疑義のある命令・指示がなされた場合、部下は恩義のある上司との人間関係を損なうことを恐れるあまり、その命令・指示に従ってしまうようなこともあり得るのではないだろうか。ここに、コンプライアンス確保を危うくする人間心理の落とし穴が、あるように思われるのである。

* 1. **ソトに対する関心の希薄化**

繰り返しになるが、竜嵜喜助「裁判と義理人情」によれば、会社への義理を大切にする考え方は、身内（ウチ）の信頼は大切にするが、外（ソト）の集団に対しては嘘をついてもかまわないという考えに通じ、これは、ソトの信頼に対する関心の希薄化となるとのことである。

義理を重んじ、義理で結ばれた人間関係を大切にする心理は、必然的にその人間関係の外の世界、すなわち世間に対する関心が希薄化するのであろう。ロッキード事件における全日空幹部による偽証は、まさにこの心理が、世間への関心を希薄化させた結果といえるのではないだろうか。

1. **コンプライアンス確保のために**
	1. **義理のメリット・デメリットの認識**

現代の日本人は、いまだに義理に縛られている。義理が日本人特有の思考・行動を生んでいる。しかしながら、われわれはそれを意識していないように思われる。コンプライアンスの確保のためには、まずは、ここからスタートすべきであるように思う。

コンプライアンス教育において、義理がどのようにして日本人特有の思考・行動を生んでいるのかを理解させ、その上で義理のメリット・デメリットをきちんと峻別して社員に認識させることが重要である。義理のデメリットを認識すれば、それを意識的にコントロールすることができるようになるはずである。

* 1. **儀礼の廃止**

義理により生じた関係が、お歳暮や年賀状等の儀礼を伴うものであるならば、その儀礼を廃止することは、社内において義理の関係が生じることを防ぎ、あるいはそのような関係が生じたとしても、それを希薄化することができるだろう。

社会において、義理が人と人との交流を円滑にするとしても、会社という組織においては、義理に縛られて思考・行動することは、合理的な判断を妨げる恐れがある。であるならば、上司と部下のあいだに義理にもとづく関係を生じさせないことが重要である。

お歳暮や年賀状等の儀礼は、私的な事柄であるため、会社の規則として禁止することは、無理があるのかもしれない。しかしながら、コンプライアンスへの影響という観点から、お歳暮や年賀状等の儀礼を、上司と部下のあいだにおいては、適切ではない行為として社員に周知し、協力を求めることは、妥当なことと言えるのではないだろうか。

* 1. **何でも言える人間関係**

上司と部下の人間関係が円滑であれば、会社の仕事も円滑に進む。この観点から、社員の忘年会や歓送迎会等の飲食費用を会社が一部補填するような施策が行われている会社もあると聞く。一定の合理性のある施策であろう。

しかしながら、重要なのは、上司と部下という上下関係としての人間関係の強化であってはならないということである。真に重要なのは、「何でも言える人間関係」の強化である。単に、上司と部下の人間関係が強化された場合、そこでは、より一層、義理に縛られた部下の姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。これは、コンプライアンス確保のためには、避けなければならない。不正の命令・指示に対して、部下が「No」と言える人間関係の構築こそが、重要である。

このような人間関係を上司と部下のあいだで作り上げるには、社長を筆頭に、各部門のリーダーが、日常的に「何でも言える人間関係」の醸成に努め、それを企業文化にまで高めていかなければならない。コンプライアンス部門は様々な施策をおこなって、そのような企業文化の構築を目指すべきである。

* 1. **ソトの世界を意識させる**

義理で結ばれた人間関係が外の世界への関心を希薄化させ、それがコンプライアンス違反の一因になるのであれば、外の世界を意図的に意識させることは、コンプライアンス確保に有効なのではないだろうか。言い換えれば、コンプライアンス違反が発覚したときに、世間はその会社のことをどのように見るのかを意識させることである。

日本人は本来、世間の目を気にするものである。「世間体が悪い」「世間の笑いものになる」などの慣用句を見れば、世間からの評価は日本人の行動規範になっているといえるだろう[[9]](#footnote-9)。世間というものを意図的に意識させることは、コンプライアンス違反を回避しようとする意識につながるはずだ。

コンプライアンス部門による施策としては、過去の具体的な事例を参考に、コンプライアンス違反に対し世間がどれほど厳しく批判し、信用の失墜を招いたかを社員の意識に植え付けることが有効であろう。

1. **まとめ**

義理とは、他人から受けた好意に対しお返しをしなければいけないという慣習が、社会的拘束力を持つようになったものである。

そのような慣習は、稲作中心のちいさな集落の中で長年にわたり積み重ねられて、道徳にまで高められていった。その背景には、多神教の文化がある。これが義理を個別主義的道徳にした。つまり、自分と他人の関係がどのようなものなのかに応じて、自分の意味付けが変わってくる。他者に依存して自分が規定されるのである。だから、上司は部下にとっては、会社の外のあらゆる生活の場面においても、上司なのである。従って、義理で結ばれた関係は、より一層強固な結び付きとなる。

義理を生んだもう一つの要因は、江戸時代の武士階級に朱子学が浸透したことである。武士は戦う者として名誉を重んじるのであり、この名誉の意識が恥の文化とともに、義理を欠くことを回避しようとする意識を育んだ。義理を欠くことをすれば、恥をかき面子を失うからである。これは、義理の観念をより強固なものとしていった。このような武士の道徳観は、町人や農民にも浸透していった。

義理というものを、コンプライアンスの観点から見ると、以下のような問題点が浮かんでくる。

1. 義理を重視し過ぎるあまり、コンプライアンスを軽視してしまうこと。
2. 義理で結ばれた人間関係を損なうことを恐れるあまり、コンプライアンスを軽視してしまうこと。
3. 義理で結ばれた人間関係は二人だけのウチの世界であり、このウチの世界に閉じこもっていると、どうしてもソトの世界への関心が希薄化し、ひいてはコンプライアンスというソトのルールへの関心を欠くことになる。

このようにして義理から生じる人間の意識は、コンプライアンス違反の落とし穴になる可能性を秘めている。その対応策としては、以下のものが考えられるであろう。

1. 社員に義理のメリット・デメリットを認識させることである。認識させれば、これをコントロールすることができる。
2. 会社の中での人間関係において、お中元やお歳暮などの儀礼を廃止することは、義理の関係を生じさせない、あるいは義理の関係を強化しないことにつながる。
3. 社員間で、特に上司と部下の関係において、何でも言える人間関係を作ることは、義理にしばられて不正な行為に加担してしまうようなことを防ぐことができるだろう。
4. 社員に会社のソトの世界を意識させることは、不正な行為を思いとどまる効果がある。過去のコンプライアンス違反の事例を参考に、世間はそれを厳しく批判し、会社の信用を著しく失墜させたことを社員の意識に植え付けるべきである。

以上

1. 山折哲雄「義理と人情　長谷川伸と日本人のこころ」（新潮選書、2011年10月）を参考にした。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 小池利正「あまえと義理－日本人の心の構造」（鳥影社、2006年12月）を参考にした。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 竜嵜喜助「裁判と義理人情」（筑摩書房、1988年6年）を参考にした。なお、本書発行の四年後1992年9月、最高裁判決で懲役三年・執行猶予五年が確定している。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 人と人との縁はすべて偶然のものではなく、前世からの因縁によって生じるものなので、どんな出会いも大切にしなければならない、という意味。なお、「多生」とは、六道を輪廻して何度も生まれ変わるという意味であり、「多生の縁」とは、前世で結ばれた因縁のことを言う。一期一会に通じる考え方のように思われる。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 源了圓「日本的義理はこうして成立した」(月刊エコノミスト1973年7月)を参考にした。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 中根千枝「義理人情の普遍性と特殊性」Energy Vol.5 No.2, 1968年（エッソ・スタンダード石油社誌）を参考にした。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 桜井庄太郎「義理人情の歴史」(Energy Vol.5 No.2, 1968年（エッソ・スタンダード石油社誌）)を参考にした。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 川島武宜「義理」(思想327号、1951年)を参考にした。この論文は、「菊と刀」の共同研究の結果に川島が若干の意見を付してまとめたものとのこと。 [↑](#footnote-ref-8)
9. より詳しくは、小林篤来「恥の文化と罪の文化」（http://jpcompliance.starfree.jp/report.html、2019年5月22日）を参照ください。 [↑](#footnote-ref-9)